氏名（本籍）	ふぉるたにゅ　くらうでぃあ FORTAGNE　CLAUDIA（ドイツ）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 108 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	ドイツにおける漆芸の発展と普及
論文審査委員	主　査　　教　授　　若　山　裕　昭 副　査　　准教授　　加治屋　健　司 副　査　　准教授　　城　市　真理子

論文内容の要旨

本論の目的は、特にドイツ文化圏における日本の漆芸に関する啓蒙、支援および知名度の向上にある。21世紀の新たな考古学的資料から、9000年の漆文化は日本発祥であることがわかった。漆の特長と高い品質は「漆」（Urushi）という意味にも込められている。日本語表記「漆」および音読み「シツ」は、中国語に由来する。日本に仏教を伝播させた中国と朝鮮の人々は、漆芸分野の師でもあった。平安後期の純和風化が完成すると漆芸のような日本文化も全盛期を迎え、加飾技法が発展し様々な様式が生まれた。16世紀になると漆芸品は輸出され、芸術性豊かな多数の漆芸品にヨーロッパ人は驚嘆した。こうして、輸出品として南蛮漆器や紅毛漆器が制作されることとなった。

ヨーロッパのルネッサンスからバロック時代への過渡期に現れた漆芸品は、東洋と同じく高い評価を得た。魅力的な漆芸品は磁器とともにヨーロッパの東洋に対するイメージを形成し、17、18世紀には、城や邸宅にラックキャビネットや驚異の部屋が設置され、異国情緒あふれる品々が展示された。後にこれらはドイツの美術・博物館のコレクションの礎となった。コレクションは吟味の末購入され、時に他の施設等から提供を受けながら拡大した。現在、ドイツの美術・博物館に収蔵されている漆芸品の数は少なくとも3500点を数え、ドイツ語による包括的な出版物にも、ヨーロッパにおける漆芸研究の充実が現れている。

ヨーロッパで入手可能な樹液や油等の素材を用いて日本の漆が模倣され、ドイツではラッカー芸術家のジェリー・ダグリー、マーティン・シュネルやハインリッヒ・シュトーブヴァッサーらが、ベルリン、ドレスデン、ブラウンシュヴァイクにラッカーの中心地を作り上げた。

工業化により、ドイツではラッカーと工芸の概念が分離され、手工芸家の制作工程の一部であったラッカー製造は、ラッカー製造所の設立と共に18世紀よりそれ自体が製品

となった。工業製品が溢れファインアートとは対照的に手工芸は名声を失ったが、現在のドイツでもこうした考え方が主流である。この傾向は、リベラル・アーツが高く評価された16世紀のアカデミア設立にまで遡る。

幸いにも現在の伝統と個への回帰現象により、意識の変革が興っている。一般的に、特別でオリジナルなものに対する敬意がドイツ人の間にあることは、マイセン陶磁器を「白い金」と表し評価することからも明らかである。"Schwartz Porcelain"（黒い磁器）はマイセン磁器工場による、磁器の表面に漆器の趣を与える試みであった。

日本はドイツにおいて評価が高く、特に若い世代が日本文化に興味を持っているため、ドイツの文化圏に漆芸を確立できる可能性があると言える。こうした好条件を活かし、大学教育を通して若いデザイナーや芸術家、工芸家に対して漆への関心を育てることもできるであろう。教育機関の交換留学制度を利用し、ワークショップを開催するといった方法も考えられる。好奇心やクリエイティビティにあふれ、とらわれない発想力には、漆芸の新局面を開く潜在力があると考える。その結果として、ヨーロッパ的価値観を持つ人々も、漆芸を認識し、深く理解することが可能になるかもしれない。

ヨーロッパでも希有な存在であるBASF Coating有限会社のミュンスター・ラッカー芸術博物館は、ディレクターのモニカ・コップリン博士のもと大規模な専門図書館を有する研究施設である。ここでは漆芸やヨーロッパのラッカー芸術の歴史について厳選されたテーマの特別展も開かれている。2012年には「ヨーロッパの作家にとっての漆/Japanlackという素材」（urushi - Japanlack als Werkstoff europäischer Künstler）展に、ドイツ人漆芸家ヘリ・ガーブラーとマンフレッド・シュミットの作品が展示された。両名は国内外にて幾度となく表彰され、「国際漆展・石川」の特別賞も受賞している。ドイツに漆の木を植える等、両名は研究を続け、専門知識やビジョンとその仕事ぶりで、漆/Urushiという概念の普及に貢献できるであろう。

両名の仕事は、漆/漆芸の啓蒙活動にも多く当てられている。これは、ドイツ人に漆器を日常的に使用する習慣がないためであり、この傾向は美術商取引においても見られる。

伝統的な漆文化を持つ東アジア諸国では、漆を意味する様々な表現と定義がある。絶え間ない言語の発展と意味の変遷により、現在中国語で使用されているチ （漆）は、合成塗料を意味する。ドイツの状況もこれに似て、19世紀まではラッカーとワニスは区別されず、現代でもJapanlackというJapanとLackとの組み合わせであっても、ラッカーとは一般的に化学合成物を意味するため、Urushiというアルファベット表記を固有概念として確立する必要がある。そのため、本論でも漆/Urushiという表記を一貫して使用している。

20世紀初頭の漆/漆芸への高評価を得るため、ドイツの文化圏での漆芸の普及には、適切なコミュニケーションが必要である。特に作品は、漆/漆芸品の品質と多様性等の潜在能力を伝えるものでなければならない。そこには、数千年に及ぶ伝統の、現代における姿が現れているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツにおいて漆芸がどのように発展したかを考察し、今後の普及に関する提案を行おうとする研究である。第１章は、漆の定義や日本における文化的・歴史的意味を考察している。日本の漆芸をヨーロッパとの関係で考察した第２章は、漆芸が歴史的にヨーロッパからどのような影響を受けたのか、そして、ヨーロッパのラッカー芸術が日本の漆芸からどのような影響を受けたのかを検討している。第３章は、現代ドイツにおける漆芸の受容をテーマとし、ドイツにおける日本文化への関心、ドイツの美術館・博物館の漆芸コレクション、ラッカー芸術の施設や研究者、ドイツの漆芸家について論じている。第４章は、ドイツにおける漆芸の普及に関する提案として、美術と工芸の区別や、翻訳語の問題に触れつつ、マイセン磁器との比較などを考察している。

本論文は前半で、日本の漆芸の歴史や、ヨーロッパとの関係を多くの研究を参照しながら考察しており、申請者の漆芸に対する十分な理解を裏付けている。現代ドイツにおける漆芸の受容という、一般的には知られておらず、十分に研究されてもいない問題に、本論文は取り組んでおり、新しい知見を少なからず含んでいる。

上記の点で優れた論文であるため、本審査で合格とした。